

■プロフィール

吉澤 清良

國學院大學 観光まちづくり学部 教授

(前職)

1992年度～2025年度 公益財団法人日本交通公社 (JTBF) 調査研究部門

2023年度～2025年度 立命館アジア太平洋大学 サステナビリティ観光学部

特別招聘教授 (JTBFより出向)

(専門領域)

観光計画・戦略の策定／観光資源評価／ユニバーサルツーリズム／人材育成研修等の企画・運営

■旅の図書館

1. 施設概要

- ・歴史と沿革： 1978年に「観光文化資料館」として開館。2016年に現在の南青山へ移転・リニューアル
- ・設立母体： 公益財団法人日本交通公社 (JTBF)
- ・基本理念： 観光の研究・実務・地域づくりに役立つ知財集積・発信・交流のプラットフォーム

2. 主な特徴・コレクション

- ・豊富な蔵書(約6～7万冊)： 国内外の観光研究書、学術誌、自治体の観光統計、調査研究報告書を網羅
- ・稀少・歴史的資料： 明治・大正・昭和初期の旅行案内書、古書、時刻表などの貴重書
- ・UNWTO寄託図書館： 国連世界観光機関 (UNWTO) の公式寄託図書館としての認定
- ・独自検索体系： 観光研究に特化した独自分類(「T分類」「F分類」)の運用

3. フロア構成

- ・1F ライブラリープラザ： 最新の観光情報、観光関連雑誌、JTBF機関誌『観光文化』等の展示・交流スペース
- ・B1F メインライブラリー： 観光研究資料、統計資料、古書等を体系的に調査・閲覧できる専門スペース

■観光と図書館～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～ (観光文化 243号、2019年10月)

特集1 図書館を取り巻く動向と観光振興 (吉澤 清良)

特集2 事例に学ぶ、図書館を活かした地域の観光魅力づくり

- | | |
|-------------|----------|
| 高山市図書館「煥章館」 | (西田 純一) |
| 八戸ブックセンター | (音喜多 信嗣) |
| 恩納村文化情報センター | (大隅 一志) |
| 奈良県立図書情報館 | (乾 聡一郎) |
| 甲州市立勝沼図書館 | (古屋 美智留) |
| 小布施町立図書館 | (市村 勝巳) |
| 千代田区立千代田図書館 | (井上 理江) |
| 東近江市立八日市図書館 | (山梶 瑞穂) |
| 伊那市立高遠町図書館 | (諸田 和幸) |

○コラム愛知県図書館「二度目の旅は図書館から」 (大隅 一志)

○コラム大好物は郷土資料 (眞鍋 じゅんこ)

特集3 対談：観光と図書館 連携と活用の可能性をあらためて考える (嶋田 学、猪谷 千香) 」



○コラム半世紀以上も前に提唱されていた“観光と図書館”
 視座観光と図書館～地域の観光に図書館はどう寄与できるか～
 ○地域の観光に寄与する図書館注目事例

(大隅 一志)
 (吉澤 清良、大隅一志)



観光と図書館

地域の観光に図書館はどう寄与できるか

近年の図書館(特に地域の公共図書館)には、様々な地域の課題解決や地域住民にとっての第三の居場所(サードプレイス)などの役割も期待され、地域の再生・活性化に欠かせない存在として注目されつつあります。では、観光地や観光振興に取り組む地域にとって、図書館とはどういう存在なのでしょう？そもそも社会教育施設であり地域住民を利用対象とする公共図書館では、基本的に観光客は利用者として想定されていません。多くの観光客の来訪によって成り立っている観光地においては、地域住民と同様に、観光客も図書館の重要な利用者として意識されてもよいと私たちは考えます。図書館を地域の観光魅力づくり、観光振興に活かしている事例から、図書館と観光の連携・融合の可能性を探ります。



変わりつつある図書館

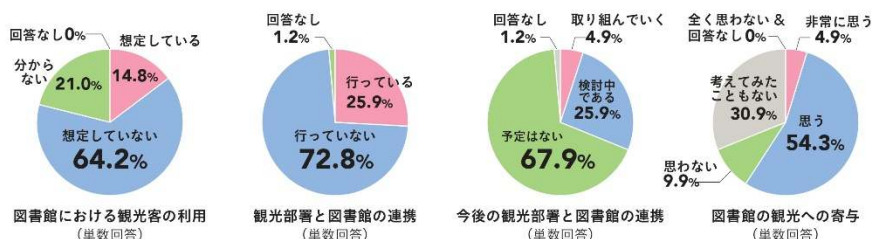
わが国の公共図書館は、1990年代まで、図書の貸し出しを重視して普及・発展してきました。2000年代に入ると、指定管理者制度の導入や図書館の新たな役割や可能性を示唆した『未来をつくる図書館』の刊行などを機に、地域の課題解決やビジネス支援を行う図書館などが登場してきます。さらに近年、図書館は施設・運営サービス両面でより多様化しつつあり、まちづくりの中核施設として重要な役割を果たすようになってきています。

わが国の図書館の歩み



まだ観光と結びついていない図書館

現状では、観光行政において図書館が施策のなかで意識されることは少なく、図書館が地域の観光とほとんど結びついていないのが実情です。



全国の自治体の観光部署を対象に(公財)日本交通公社が2019年7月に実施した「観光と図書館に関するアンケート調査(81団体回答)」より

観光に図書館を活かすヒント

近年、図書館での取組が地域の観光に寄与する事例も各地にみられるようになってきました。それぞれの地域特性や課題をふまえた創意あふれる取り組みには、地域の観光に図書館が寄与していくための多くのヒントを見出すことができます。

1 観光対象・目的地となる

魅力の高い図書館建築や特徴的な蔵書(コレクション)、地域らしい企画展示などは、それ自体が観光対象となり来館目的ともなります。

図書館建築

歴史的建築物を活用したり、地域のランドマーク、シンボルともなりうる建築デザインは、図書館建築自体が地域の観光資源ともなります。

大阪府立中之島図書館 大阪府

1904年に建てられ国の重要文化財に指定され、観光スポットでもある大阪府立中之島図書館。歴史的建造物と知的遺産の宝庫でもある図書館との親和性の高さを感じさせる



高山市図書館 岐阜県

飛騨地域の近代学校創立の先駆けとなった歴史的施設「煥章学校」を模した高山市図書館「煥章館」は、「地域の輝かしい文化を築く拠点」を体現した施設。観光エリアに立地する図書館として、観光情報サービスも充実しており、国内外から観光客も訪れる



(コレクション)

蔵書や企画展示

地域の歴史や文化、産業などに関する工夫を凝らした郷土資料コーナーや企画展示は、地域文化の発信に大きな役割を果たします。

甲州市立勝沼図書館 山梨県

地域の基幹産業であるぶどうとワインに関する資料3万冊を揃え、見応えのある資料展示を行っている

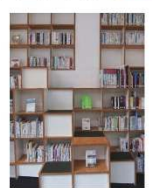


施設の複合・融合化

博物館や美術館などの文化施設等との複合化、さらに融合化は、集客力を高め、より相乗効果の高い地域文化の発信につながります。

太田市美術館・図書館 群馬県

美術館、図書館、カフェ、ショップ、イベントスペース等から成る複合施設。駅前に立地し、中心市街地活性化のシンボリック的存在。館内は回遊路沿いに書架や閲覧スペースなどが配置され、まるで美術館の中にあるような図書空間が魅力。



2 観光客の滞在・時間消費の場となる

旅行先、滞在先で、読書や郷土資料などを通じた地域の風土・文化の探求、特色あるイベントや体験プログラムへの参加といった活動の場として図書館が利用されるものです。滞在の延長化や観光活動の多様化にもつながります。

恩納村文化情報センター 沖縄県

沖縄有数のリゾート地に立地。全国どこに住んでいても本を借りることができる。周辺ホテルに本を貸し出し「ミニライブラリー」を設置することで、地域での滞在の長期化にも寄与している。



ANAインターコンチネンタル万座ビーチリゾートに設置したミニライブラリー



村外在住→ 村内在住(在学・在勤)
村民と村外客向けの2種ある利用者カード

奈良県立図書情報館 奈良県

最寄のJR奈良駅にあるホテル日航奈良と連携。図書館では20～30冊の本を選書、ホテルではブックリストを作成し全客室に配置している。図書館主催イベント参加者への特別宿泊プランの設定も。



ホテル日航奈良と図書館とのコラボプラン

3 地域をつなぐ (地域と連携し地域魅力を高める)

図書館だけで完結せず地域と様々に連携することは、地域の魅力の向上や観光の振興につながります。

■ 甲州市立勝沼図書館 山梨県

地元ワイナリー若手集団の話を聞き、試飲や音楽を楽しむ交流イベントでは、貸出カウンターがバーカウンターへと変化。全国から多くのファンが集う。地域産業を活かしたワインツーリズムの展開に大きく寄与している。



■ 小布施町立図書館 & 小布施町 長野県

地域住民を巻き込みながら図書館の取り組みをまちなかにも展開する「まちじゅう図書館」の先駆けとなった。観光客と住民の交流を楽しむ仕掛けとして、各地の図書館でも同様の取り組みが広がっている。



まちじゅう図書館のシンボル・フラッグ「おぶせどり」



■ 伊那市立高遠町図書館 & 高遠町 長野県

図書館も協働し、町のいたるところに本棚がある町づくりを推進している。



■ 千代田区立千代田図書館 東京都

区内観光にも対応するコンシェルジュサービスを提供。神保町を巡る図書館発のツアーは、区外在住者の参加が7割を占める。区内の博物館・美術館や出版社等との地域連携による展示コーナーも常設。人的サービスと地域連携展示により来館者と街をつなぐ拠点となっている。



4 地域魅力を発信する

地域の観光情報の提供や、地域ゆかりのテーマによる図書コーナー、特色ある企画展示等を通して地域の魅力発信に寄与するものです。

■ 東近江市立八日市図書館 滋賀県

市内7つの図書館の職員が関わり、行政職員や地域住民の協力のもと地域密着型の情報誌『そこら』を発行。情報誌で紹介した人やモノをテーマとした「そこら展」も開催



市民がまちの魅力を発掘・発信する「そこら」

■ 伊那市立高遠町図書館 長野県

図書館所蔵の古地を活用し開発した携帯端末用アプリ「高遠ぶらり」を開発、それを使った街歩きを展開。「高遠ブックフェスティバル」は「本の街高遠」を象徴するイベントに



高遠ブックフェスティバル



携帯端末用アプリ「高遠ぶらり」

観光まちづくりに 図書館を活かすために

図書館は地域文化の根幹を支え、「資料」と「人」そして「地域」をつなぐ重要な役割を担っています。
観光との親和性を活かし、図書館と観光がより効果的に連携・融合を図ることは、
地域の観光魅力の発信やまちづくりに大きく寄与します。

1

観光客も含めて、 誰もが足を運べる フラットな場所に

公共施設の中で最も利用され、誰でも気軽に足を運べる図書館へ観光客の来訪を促すことは、観光活動の多様化、時間消費の場の増加につながり、地域住民との交流を生み出します。

2

集客効果を活かし 相乗効果の 高い観光振興へ

特色・魅力ある建築物やコレクション、イベント・行事、付帯機能（飲食等）による図書館の集客効果を活かし、観光施設等と連携していくことで、観光面でも高い相乗効果を発揮することができます。

3

地域にしかない魅力に 「気づく、見つける、創る」 情報発信の拠点に

地域が観光に取り組む意義の一つは“地域を光らせる”こと。図書館は、地域の知的遺産の集積を活用しながら、情報を「地域の魅力として可視化」していく要の存在です。観光客という外の眼を加えることで、より魅力ある地域づくりにつながります。

図書館と観光の効果的な連携・融合による 地域の観光魅力づくり・活性化

● 地域魅力の発見・発信 ● その地ならではのツーリズム、観光まちづくりの展開 ● 観光産業、地域産業の振興

これからの課題

観光と図書館の連携・融合に向けて

観光行政や 地域関係者との連携

図書館、行政、民間団体・住民等が、観光と図書館が連携・融合していくことの意義や課題、方向性を共有しながら、観光の中に図書館を活かした施策を推進していくことが必要です。

観光客が図書館を 利用しやすい環境づくり

観光客が訪問地の図書館を利用しやすい環境づくりが不可欠です。そのための利用サービスや仕組みづくりに地域ぐるみで創意工夫していくことが望まれます。

“地域を想う” ライブラリアンシップ

図書館員は、人と地域をつなぐコンシェルジュともいえる存在です。地域の貴重な知的遺産を次代に継承しながら、その魅力を伝える気持ちとスキルをもった人材を育てていくことが大切です。

こちらも注目

半世紀以上も前に 提唱されていた “観光と図書館”

旅行者、観光客のための図書館の必要性、観光と図書館の連携・融合は、有識者により古くから提唱されており、古くて新しい課題といえます。

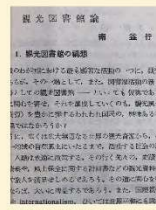
和田萬吉「旅客の為に図書館」



ジャパン・ツーリスト・ビューロー『ツーリスト』
第六年第五号、1918年9月、pp.17-22
※和田萬吉：東京帝國大学図書館長（当時）

- 遊覧地、鉄道、汽船、ホテル等で小規模な図書館を設けることは緊切。特に避暑地など旅行者が長期滞在する場所では、旅行者のみならずその地域の繁栄を図る一策となる。
- 汽車、汽船、旅館は、その土地の有志と協力して小図書館の設置に早く着手すべきである。
- 蔵書の数としてはそれほど多くなくても良いが、きちんと選書したものを置くこと。備えるべき図書としては、その地域の歴史、地理、工芸、産業などの郷土資料が第一。

南益行「観光図書館論」



日本図書館研究会編『図書館界』
第6巻第3号、
1954年1月、pp.109-110

- 広大無辺な世界の観光資源から一地域の自然風土にいたるまで、人類は永遠に散策する。その行く先々の史蹟を物語る資料や風土保全に関する計画などの観光資料は、必ず旅人を満足させる。
- 観光図書館が中心となり高度な観光文化活動が展開されるならば、国家・社会的、文化的に大きな価値を創造し、主対象となる観光客の受ける便益も大きい。
- 資料の種類：観光地図、観光写真、ポスター、絵葉書、郷土資（史・志）料、観光リーフレットなど



旅の図書館
LIBRARY OF TOURISM CULTURE

詳細は公益財団法人日本交通公社機関誌『観光文化243号』特集をご参照ください。ホームページでもご覧いただけます。

■別府市 図書館を核とした共創交流拠点「こもれびパーク」 概要

①施設の基本スペックと事業規模

- ・施設名称：共創交流拠点 こもれびパーク（別府市立図書館）
- ・所在地：大分県別府市大字別府字野口原3013番1（市役所隣）
- ・敷地面積：約17,000 m²
- ・建物規模・構造：地上3階建て（+別棟「地域・郷土資料館」）
- ・延床面積：約5,000 m²
- ・総事業費：約51億円
- ・開館日：2026年3月28日



②施設概要・主要機能

- ・コンセプト
 - ～単なる「本を読む場」にとどまらず、「ラーニングコモンズ」「アクティブコモンズ」「クリエイティブコモンズ」の3機能を備え、多様な世代が立ち寄り・交流・創造を行える拠点
- ・新・別府市立図書館
 - ～開架冊数：約15万冊（以前の約1.5倍）
 - ～最大収容冊数：約32万冊
- ・共創交流スペース
 - ～交流サロン、カフェコーナー、郷土資料展示スペース
 - ～多目的ホール（収容人数 約60名、会議やイベント用）
 - ～音楽スタジオ（音響機材・各種楽器完備）

③利用者の声と課題

- ・空間デザインと利便性
 - ～「本が見やすい配置・本棚の高さで、空間全体が落ち着いている」
 - ～「Wi-Fiやコンセント電源が完備されており、滞在型図書館として非常に使いやすい」
- ・サードプレイス（サードプレイス機能）としての定着
 - ～単に本を借りるだけでなく、「カフェのコーヒーを片手に読書を楽しむ」「別府公園の緑や源泉かけ流しの足湯に浸かりながらくつろげる」など、市民の“居場所（サードプレイス）”として親しまれている。
- ・予約が相次ぐ音楽スタジオなどの多機能エリア：
 - ～1時間単位で利用でき、楽器の貸し出しも行っている音楽スタジオは「公園の緑を見ながら演奏でき、音響も素晴らしい」と評され、開館間もない段階から多くの予約で埋まるなど順調な稼働を見せている。
- ・市民協働・文化的な取り組みへの賛同：
 - ～障がい者アートの作品を採用した図書貸出カードや、子どもたちが図書の楽しさを学ぶ「子ども司書養成講座」の設置など、ハード面だけでなく「市民とともに育っていく図書館」としてのソフト面の工夫も高評価を得ている。
- ・今後の課題
 - ～長期的な利用の維持（リピーター確保）

（参考）

tosテレビ大分

別府市に交流拠点施設「こもれびパーク」完成 図書館の閲覧書籍は約15万冊 カフェコーナーも

https://www.youtube.com/watch?v=iKGfskkK_0U

OBS News

“読書離れ”に挑む 別府市の新図書館「こもれびパーク」1日2500人が来館 足湯・カフェ・音楽スタジオも備える新拠点の戦略 大分

<https://www.youtube.com/watch?v=n70hjAj37bY>

■地域・郷土資料館

①目的

- ・ 歴史資料を通して、地域の魅力や価値の再発見と継承
- ・ 特に温泉とともに発展してきた別府市の地域文化の発信
- ・ 市民同士の交流と地域への愛着の醸成と、新たな地域文化の創造

②コンセプト：いきてるミュージアム

～地域とつながり、
地域とともに生き続けるミュージアム

③機能

- ・ 温泉とともに発展してきた別府の歴史を主要テーマにした情報発信機能
(歴史的・科学的情報のインフォメーションセンター)
- ・ 温泉の「蔵」として、収集・保存・活用、公開機能
- ・ 学習・研究サポート機能
- ・ セミナー・イベント開催機能

(ピックアップ！～映像展示～)

「地域・郷土資料館」での科学的・学術的な温泉解説地域・郷土資料館の目玉コンテンツとして、別府の温泉が形成される仕組みを学べる映像展示（ビデオ解説）が常設。

- ・ 展示内容：なぜ別府にこれほど多種多様な泉質・豊富な湧出量の温泉が存在するのかという「温泉ができる3大要素（熱源・水・構造）」や、複雑な地質メカニズムをアニメーションや映像で視覚的にわかりやすく解説。地質学・温泉学的なアプローチだけでなく、温泉とともに歩んできた別府の歴史（古文書、絵葉書、古地図などの資料）と合わせた多面的な理解ができる構成。

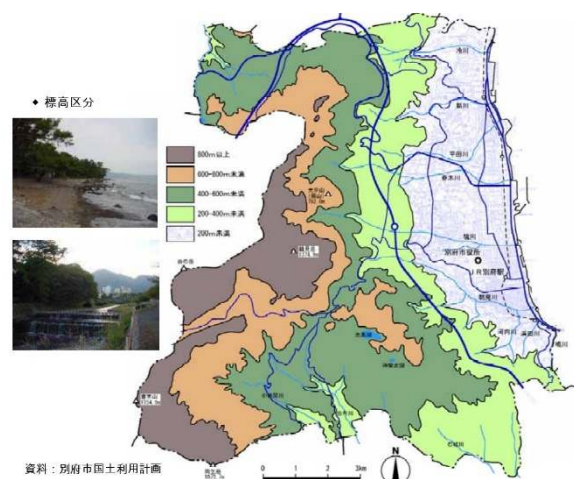
④主な対象者と狙い

一緒に市民に対し、文化交流や魅力の再発見を促す
同時に観光客に対して、別府温泉独自の魅力や価値を発信する

◆参考 別府市の概要

1. 位置と地勢

別府市は、九州の北東部、瀬戸内海に接する大分県の東海岸のほぼ中央に位置し、南は野生のニホンザルで有名な高崎山をへだてて県都大分市と隣接、北は県北・国東テクノポリス地域としてハイテク関連企業が進出する国東半島の市や町と接し、西は阿蘇国立公園に属する由布岳・鶴見岳の連山を中心に南北に半円形に連なる鐘状火山（トロイデ）に囲まれその裾野がなだらかに波静かな別府湾に続く扇状地である。



市内には、古くから「別府八湯（別府・浜脇・観海寺・堀田・明礬・鉄輪・柴石・亀川）」と呼ばれる温泉群が点在し、2千8百を数える源泉から湧出する温泉は、毎分約10万2千リットルにも及び、医療、浴用等々、市民生活はもとより観光、産業面にも幅広く利用されている。

標高区分

https://www.city.beppu.oita.jp/doc/seikatu/sumai_tosi/tosi_keikan/machidukuri/masterplan/02.pdf

（関連データ）

- ・面積：25.34 km²
- ・人口（2023年、住民基本台帳）：112,991人（外国人：4,293人）
- ・産業別就業人口（2020年、国勢調査）：一次609人（1.3％）、
二次6,365人（13.2％）、三次41,266（85.5％）
- ・源泉総数：2,217、総湧出量：83,058 L / m
- ※その他、参考資料として「統計でみる市区町村のすがた」（総務省統計局）より別府市関連データを抜粋。

2. 沿革

別府温泉について書かれた最古のものは奈良時代初期の「豊後国風土記」で、古代から地獄が存在し、豊富な天与の温泉に恵まれていたことが伺い知れる。今日の別府の地名は、荘園時代に必要とされた免符である「別符」が「別府」と書かれるようになり、これが地名となったと言われている。鎌倉から室町時代には、大友氏の統治下におかれ、戦国時代に大友氏が除国されたのち、江戸時代には、幕府直轄の天領として高松代官の下で統治された。

明治時代には、関西、四国航路の開通、日豊本線の開通等、交通機関の発達と交通路の整備により大きく発展し、明治39（1906）年には浜脇町と別府町の合併により別府町が誕生し、湯治場として知られるようになった。大正時代には、眺望の良い海岸一帯に旅館街が形成され始め、観光施設も整備されて観光地としての性格を加え、大正13（1924）年4月1日に別府市が誕生した。その後、隣接する町村を編入し、観光温泉地としての今日の別府市の基盤を確立するに至った。

太平洋戦争の戦災をまぬがれ、豊かな自然と豊富な温泉資源に支えられながら観光温泉地として発展を続けてきた。昭和25（1950）年、「別府国際観光温泉文化都市建設法」により、別府市は国際文化の向上と世界の恒久平和の達成に重要な役割を果たす都市として位置付けられ、以来、別府駅の高架化、国道10号の拡幅、九州横断道路（やまなみハイウェイ）や大分自動車道の開通、宇佐別府道路、国際観光港の整備等々、基幹交通網の整備により、着実に発展を続けながら今日に至っている。令和6（2024）年4月1日には市制100年周年を迎えた。

3. 新湯治・ウェルネスの概要

伝統的な湯治文化を背景に持ちながら、現代のニーズに合わせた新しいヘルスツーリズム・観光スタイル。

①目的・コンセプト

医療・美容・健康をテーマに、温泉の効能を「科学的根拠（エビデンス）」によって見える化し、別府の自然・食・文化などの地域資源と組み合わせることで、心身の健康増進および長期滞在型観光の確立を目指している。

②主な取り組み・特徴

- ・温泉効果の科学的検証（見える化）：九州大学等との共同研究により、多種多様な泉質への継続的な入浴が腸内細菌叢（マイクロバイオーーム）や疾病リスクに与える影響などを科学的に解析。
- ・民間・事業者との共創：企業の美肌温泉認証制度（POLA等）や薬膳・地獄蒸し料理、ヨガ・マインドフルネス、医療機関（分子栄養学等）と連携した多様なプログラムの展開。

- ・ **研究・実践拠点施設の整備**：大平山（扇山）麓などのエリアに民設民営方式で研究・実践拠点を整備し、産業化と地域経済の活性化を推進。
- ・ **人材育成**：「健康×観光×まちづくり」をビジネスと地域活性化に生かす専門人材・リーダーの育成。

新湯治・ウェルネス研究・実践拠点（市報別府2024.12）

新湯治・ウェルネス 研究・実践拠点の 設置場所が決まりました！



イメージ図

新湯治・ウェルネスとは？

別府の付加価値を高め、持続可能な観光地としての成長を目指す取組です。温泉の入浴効果を見える化して、その効果を別府の自然・食・文化などたくさんの地域資源と組み合わせることで、市民の皆様にはより健康で幸せな生活を送っていただき、観光客には別府ならではの特別な体験を提供して長期滞在につなげていきます。

研究・実践拠点の役割

研究・実践拠点では、温泉の入浴効果のデータを収集、解析、蓄積し、市民や事業者提供に提供するための役割を期待しています。

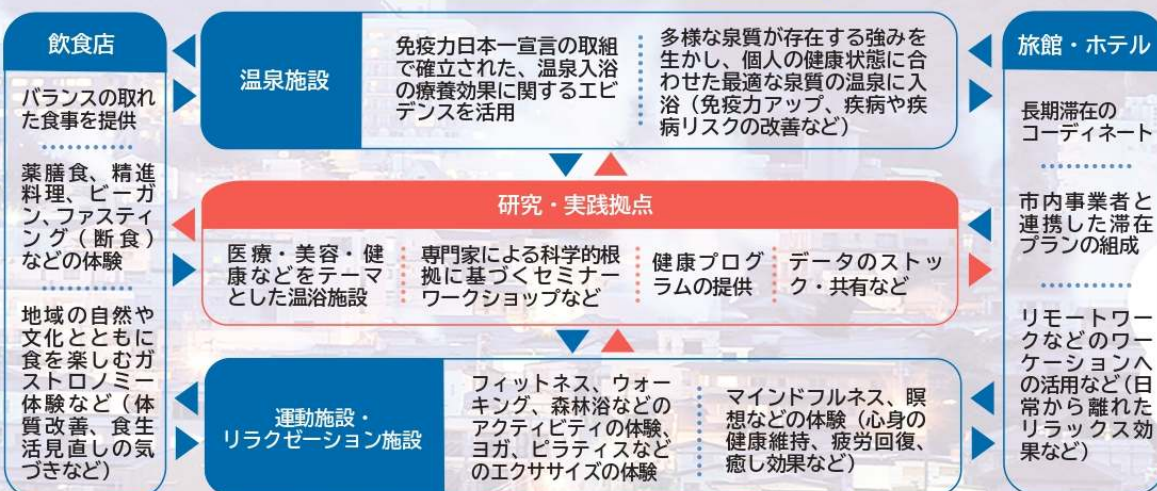
市内には、宿泊施設、飲食店、温泉施設、運動施設、リラクゼーション施設などのウェルネス関連施設が充実しています。

この恵まれた環境を最大限に生かし、より地域が潤うためには、これらの施設が個々ではなく、連携して市全体で戦略的に取り組むことが必要です。

市は、次の100年に向けて、新湯治・ウェルネスを産業化し、経済波及効果を市全域に広げていきます。

新湯治・ウェルネス推進室
☎ 1222

新湯治・ウェルネス事業のイメージ

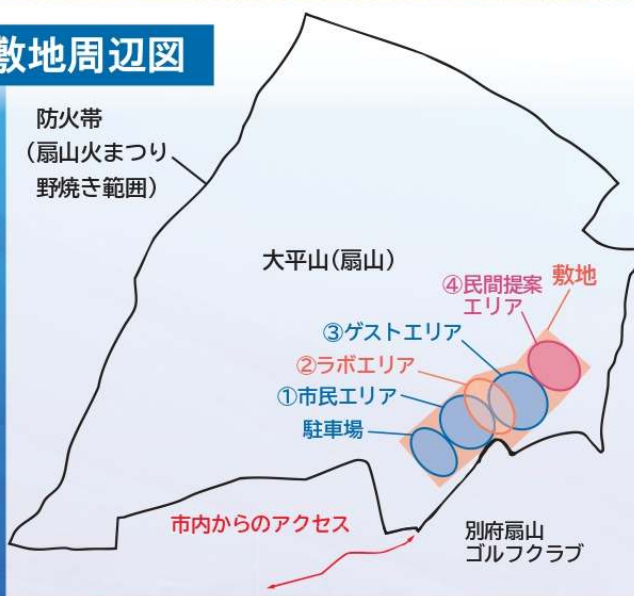




◀研究・実践拠点の設置場所は扇山の麓（扇山ゴルフ場の山側）。面積は約4ヘクタールを想定。扇山の地形を生かした、自然と一体となったデザイン。▶
ばんしげる
(デザイン：建築家 坂 茂氏)

※研究・実践拠点のイメージ図は、場所を公表するに当たってのイメージ図です。必ずしもこのデザインの施設が設置されるとは限りません。

敷地周辺図



研究・実践拠点の機能

- ①市民が日常的に健康増進のために使うエリア
※北浜温泉（テルマス）のような機能を持たせたいと考えています。
- ②腸内細菌データなどの解析、分析、管理などを行うエリア
- ③主にゲストが利用するエリア
- ④民間事業者による民間提案エリア
※現時点で想定した機能のため、民間事業者の計画によって変わる可能性があります。

Q&Aコーナー 皆様の疑問にお答えします！

Q1 市民も利用できますか？

市民エリアには、北浜温泉（テルマス）のような機能を持たせたいと考えています。市民の皆様には、日々の健康増進に役立てていただき、心身ともに健康で幸せな生活を送っていただきたいと思います。

Q2 ブルーラグーン構想との違いは？

ブルーラグーン構想はアイスランドのブルーラグーンに匹敵する大きさの湯舟をつくるという規模感のある「モノ」をつくる計画でした。新湯治・ウェルネスは医療・美容・健康をテーマに温泉効果を見える化し、別府ならではの特別な体験を提供するという「コト」に特化した事業です。

Q3 インフラ整備はどうなるのですか？

道路は歩道の整備を含めて拡幅を考えています。水道は近隣の小倉配水池から給水し、排水は公共下水につなぐ予定です。

Q4 扇山火まつりに影響は？

扇山の麓ですので、野焼きや扇山全体の景観に影響を及ぼさない範囲に限定しています。

Q5 湯量の確保は大丈夫ですか？

新規の掘削は行いません。既存の温泉を有効活用しますので、周りの温泉にも影響を与えません。

Q6 国立公園内に、施設の設置は可能ですか？

全国 35 か所の全ての国立公園で民間活用による魅力向上事業を実施するという国の大きな方針とも合っています。環境省とも協議を重ねていますので、概ね問題はありませおおむん。

Q7 設置主体・運営は誰が行うのですか？

基本的には民間事業者と連携して行う予定です。